

人生100年時代の陰で 親子共倒れ

ひきこもりの長期化が全国的に問題となつています。そうした中、市内ではひきこもりに起因する事件が4月下旬に起きてしまいました。問題はどこにあったのでしょうか。ひきこもりの家族会の吉村文恵さんに、現状と課題について話を聞きました。

市内でも起きてくる 8050問題

「事件になつてしまった福津の親子も、家庭内ではきつと親子で仲良く助け合つて毎日を過ごしていたのかもしれない」と話すのはKHJ福岡「楠の会」代表の吉村文恵さんです。

「この問題は全国的にも表面化してきています。生活保護などの公的サービスを受けていなければ行政が把握することが難しい現状があります」と話します。市内では今年4月、死後2ヵ月ほどが経過した80歳代の女性が遺体で発見され、女性と同居していた子の60歳代の男性が逮捕される事件が起きました。この男性がひきこもり状態にあり、母親に異変が起きたときに適切

な対応ができなかったことと、周囲に助けを求めることが難しかったことが事件の原因でした。

ひきこもりの背景には 日本人特有の文化がある

「ひきこもりの背景には日本人特有の『恥の文化』が大きく影響していると思います。他人に迷惑をかけたくないので、親も子も周囲に相談できない。これは変えようがない問題ですよね」と8050問題の実情が、周囲に気づかれにくく、支援が届きにくいこと、そして親子共倒れの原因にもつながつてしまつたと吉村さんは話します。さらに「ひきこもり状態に陥つた多くの人は、病院でうつや統合失調症、発達障害などと診断されています」と続けます。「でも

周囲の理解がないために近所の人に病人扱いされたり、特別な目で見られたりすることもあるのです」と。

家族会は解決の 糸口を見つける手段

楠の会は、県内数カ所で開催しています。福津・宗像地区では月に1度開かれていきます。「家族会では、同じ問題を抱える人たちが自分のことを話したり他の人の体験を聞いたりします。自身の問題解決への糸口を見つけるための手段の一つです」と吉村さんは語ります。県や市では、ひきこもりの相談窓口を設け、支援できる体制があります。しかし「経験したことのない人に何が分かるのかと

▶福津市の事件が大きく報じられた毎日新聞 2018年5月28日の西部朝刊

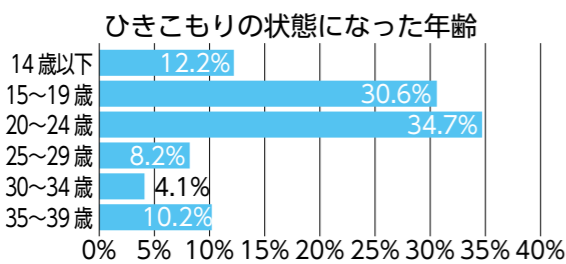
インターネット上では
非公開とします



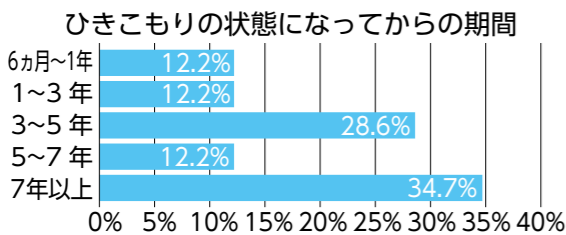
▲吉村文恵さんプロフィール: 2001年に特定非営利活動法人KHJ全国ひきこもり家族会連合会の支部としてKHJ福岡「楠の会」設立。会長として主に事務局を担当し会報編集に携わる

データで見るひきこもりの現状

内閣府が全国の満15歳から満39歳の5,000人を対象に平成27年12月「若者の生活に関する調査」を行いました。一部を紹介します。



15歳から24歳までの若年層が65.3%と圧倒的に多く占めているが、35~39歳は10%を超えている



約35%の人がひきこもりになって7年以上の期間が経っている。3年未満の人は約25%でしかない

思う人にとっては周囲と同じ境遇の人がいることで、話しやすく、重荷が軽くなる場所になり得ます」と吉村さん。ひきこもり支援の情報が共有でき、当事者ならではの理解もある場、これが家族会の役割です。

8050問題解決には 地域の理解と協力が必要

家族会に参加している女性がいました。8050問題という言葉がまだなかった10年ほど前、子どもがひきこもりだったといふ。「会に参加していろいろと学ぶことができました。振り返って思うのは、もっと早く子どもを病院に連れて行けばよかったこと。子どもが病気がたかっということを受け入れられなくなつたんですね。適切な治療のおかげで、今は仕事に行っています。8050問題は解消しました。」

吉村さんは語ります。「8050問題解決のためにはみんながひきこもりの理解をしてほしいです。8050問題は今やつと注目されるようになりました。官民挙げて支援の方法を研究してほしい。そして親は勇気を持って『助けてください』と自ら SOS を発信してほしい。」

